

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00199

研究課題名（和文）ユダヤ美術の生成・発展をめぐる研究 移動・越境する共同体の視覚文化

研究課題名（英文）A study of the generation and development of Jewish art: the visual culture of transnational immigrant communities

研究代表者

加藤 磨珠枝 (Kato, Masue)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：40422521

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、近年新発見が相次いでいるイスラエルのガリラヤ湖周辺のシナゴグ遺跡群のモザイク装飾およびローマ近郊に残るユダヤ教関連遺跡、出土品を主な研究対象とし、それらの現地調査、図版データの収集にもとづいて、古代末期から中世におけるユダヤ教美術の生成と発展の過程に新たな光を投じた。そこでは、同時代のキリスト教美術をはじめとする諸宗教美術との密接な関係についても解き明かされた。

具体的な成果として、雑誌論文および関連書評など（7件）、学会発表9件（うち2件は国際研究会）、図書（5件）、国際研究集会（1件）としてすでに発表され、現在は単行図書を執筆中である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

2024年5月現在、イスラエルによるガザ侵攻は凄惨を極めており、その一因に根深い宗教紛争が指摘されている。本研究の学術的意義の一つは、古代ローマに遡るユダヤ教美術の生成過程を論ずることで、ディアスポラとなったユダヤ人共同体と、受け入れ側の非ユダヤ人社会によって形成された視覚芸術の複雑な状況について解き明かし、現代にまでいたるパレスティナ問題の歴史的理解を深め、未来の平和への一助とすることである。

さらに学会発表、学術論文、国際美術展企画、商業雑誌への寄稿というかたちで発信された成果の一部は、国際社会における日本の役割の再考を促し、2023年開催の日伊共同講演会は両国の文化交流にも貢献した。

研究成果の概要（英文）：The research project investigated the mosaic decorations of ancient synagogue sites around Lake Galilee in Israel, where a series of new discoveries have been made in recent years. Additionally, the research examined Jewish-related sites and excavated artifacts unearthed in the suburbs of Rome. Based on these field surveys and the collection of illustrated data, the research illuminated a fresh understanding of the birth and development of Jewish art from late antiquity to the Middle Ages. The research also identified a close and intertwined relationship between Christian art and other religious arts of the same period. This research project has already produced several major outputs in the form of 8 journal article publications, 9 conference presentations (including 3 at international conferences) and 4 books, with an additional related book currently in progress.

研究分野：西洋美術史

キーワード：ユダヤ教美術 シナゴグ キリスト教美術 ローマ美術 古代末期 パレスチナ

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) ユダヤ教美術は、古代イスラエルの指導者モーセが唯一神ヤハウェから授かった十戒の1つ「あなたはいかなる像も造ってはならない」(『出エジプト記』20章4節他)に基づいて、超越的な神の存在を目に見える形や色彩で表現することを偶像崇拜として忌避するという前提のもとで論じられてきた。現在確認される「ユダヤ教美術」とは、紀元1世紀以降、ユダヤ人の生きた様々な社会において彼ら独自の共同体の中で育まれた美術であり、純粋な民族あるいは明確な地理上の区域で限定されるものではない。それはユダヤ人共同体とそれを受け入れた非ユダヤ人たちの美術、すなわち古代の西アジア、ギリシア・ローマ世界、キリスト教やイスラーム文明との相互作用によって条件づけられている。

(2) 近年、イスラエルのガリラヤ地方を中心に、ユダヤ教シナゴーク(集会堂)に関する考古学上の新発見が相次ぎ、これまで知られていなかったユダヤ教美術の驚くべき様相が明らかとなっている。本研究では同時代の諸宗教(特に、古代ローマの伝統宗教およびキリスト教)美術とユダヤ教美術を総体的にとらえながら、ユダヤ教美術の本質をなすものが何であるのかを思索し、さらに、その考察を通じて、古代～中世美術史におけるユダヤ人たちの再評価と再解釈を行うものである。

2. 研究の目的

(1) 古代末期の社会では、人びとは無性格で親しみのもてなくなった都市生活のなかで、自分たちの帰属先を信仰集団に求め、そこから独自の視覚芸術を発展させた。本研究では都市に共存していた、ユダヤ教、ローマ伝統宗教、キリスト教、ミトラス教など東方密儀宗教の信仰集団の美術も視野に含めることで、当時の都市における宗教の多様性のなかにユダヤ教美術の黎明を探求し、その後、中世キリスト教社会へと移行していく過渡期の発展プロセスをたどることを目的とした。

(2) 近年にいたるまでユダヤ人にとって視覚芸術は禁忌の対象であったと考える研究者は多いが、すでに述べたように、この前提は数々のユダヤ教の美術作品の発見・研究によって覆されている。本研究では、視覚芸術に対するユダヤ人の態度をどのように捉えるのかを考察し、美術史上における再評価も目的とする。

3. 研究の方法

(1) 5カ年の実施期間に行った研究方法は、国内外の研究機関を利用して、先行文献の渉猟を進めると同時に、それらの学問的蓄積に立脚しつつ、対象となる当時の主要作品(現存作および資料によって伝えられるもの)の整理・分析を通じてユダヤ教美術の生成と発展の過程を連続的にとらえることを基本とした。

(2) 近年、新発見が目覚ましいガリラヤ地方のユダヤ教シナゴーク(集会堂)の現地調査をはじめ、都市ローマに代表されるイタリア、さらにスペインに現存するユダヤ教関連遺跡と作品群の現地調査によって、文献のみで把握の困難な作品の現状理解を行い、実見に基づく作品分析、画像資料の収集を行うことで、従来の研究と一線を画す新知見を探求すること。

(3) 上記のプロセスによって得られた研究成果を、西洋古代～中世美術史の大きな文脈に位置付けて、再解釈、再評価するという手法を実施した。

4. 研究成果

(1) 2019年度は、基本文献の収集、精読を進め、9月にはスペインのトレドおよびイタリアのローマを中心に現地調査を実施した。古代末期のトレドは西ゴート王国の首都(560-711)が置かれた重要都市であるが、遅くとも6世紀にはユダヤ人が定住し、早くからキリスト教、ユダヤ教、やや遅れてイスラーム文化が交錯した地である。そのユダヤ人旧居住区には町の現存最古のシナゴーク(1180年頃建立、現サンタ・マリア・ブランカ聖堂)をはじめ、彼らの痕跡が数多く残ることから、シナゴーク内のストッコ装飾をはじめ、都市計画の視点から彼らの異文化との融合の実態を調査した。

ローマではユダヤ教徒のカタコンベの代表作の一つであるヴィーニャ・ランダニーニ(Le Catacombe ebraiche di Vigna Randanini)を特別許可のもとで見学した。3~4世紀に発展した彼らのカタコンベ構造は、通廊、アルコソリウム(アーチ型壁龕)、ロクルス(墓穴)など初期キリスト教徒たちのものと多くの共通点が認められるが、ここでは「コキーム」と呼ばれる竈型の特殊な形態の墓も多数実見し、その特徴を理解した。カタコンベ内の絵画については、当時の異教およびキリスト教美術に共通の花綱飾り、孔雀、小鳥、幾何学文様などが観察されると同時に、彼ら独自のメノラー(七枝の燭台)、トーラー(律法の書)を納めた聖壇、エトログ(柑橘)、ルラブ(棕櫚の葉)、神殿モチーフなどユダヤ教信仰を象徴する図像資料も多数実見しデータの収集を行った。

これらの現地調査および文献調査をもとに、古代末期のユダヤ人およびキリスト教徒共同体の女性聖職者の発展について当時のローマ社会における両者の状況を考察し、論文「中世初期ローマ教会における女性の職務とその表象について」を執筆した。

(2) 2020年度と2021年度は、新型コロナ感染拡大のため、当初予定していたアメリカおよびイスラエルでの現地調査、ローマでの文献調査を断念したが、その代わりに研究者個人の研究室にて、これまで入手した関連文献の精読、分析を集中的に行い、その成果の一部は、2020年11月開催の地中海学会全国大会第44回シンポジウム「地中海都市の重層性」、さらに2021年12月に開催の新約聖書図像研究会オンライン例会にて「初期ユダヤ教美術の諸問題」と題して発表した。

その他にも、新型コロナによる国内外の移動制限を受けて、オンライン上のアーカイブを利用したユダヤ教写本挿絵研究にも新たに視野を広げ、2022年2月に名古屋大学人文学研究科附属人類文化遺産テキスト学研究センター主催オンライン講演会「中世写本挿絵の魅力」にて発表した。

(3) 2022年度は海外での活動が以前より緩和されたため、イスラエル現地調査を8月に実施。現地での具体的な調査場所は、ガリラヤ湖西岸のハマットディベリアス、マグダラ(ミグダル)、ギンノサル、カファルナウム、コラジン、ベト・アルファ、ナハル・ハキブツィム、ベト・シェアン、同じく東北岸のゴラン高原に位置するマジユリーヤ、ウム・エル・カナティール、カツリン。その他にはベト・シェアリーム・ネクロポリス、ツイッポリ、セフォリス、善きサマリア人モザイク博物館をへて最終的にエルサレムに入り、イスラエル各地の関連遺跡および博物館・美術館を集中的に調査した。近年新発見が目覚ましいイスラエルのガリラヤ湖周辺のシナゴーク群のフィールドワークが主要な目的のひとつであったため、現地遺跡とそのモザイク装飾を実見し、画像資料まで入手できたことは大きな成果である。

(4) これまでのローマ関連の調査結果を生かしつつ英語論文としてまとめ、国際共著論集 *Storia dell' arte on the road: Studi in onore di Alessandro Tomei* に寄稿し、国際的な成果発表を行った。加えて、関連書籍の書評を2件、国際研究会での発表1件、現代的問題も含め

た公開シンポジウムの開催、美術館での講演会や商業雑誌への寄稿というかたちで一般社会にむけての情報発信も行った。

(5) 2023年度は、所属機関より海外研究休暇を取得できたため、長期間ローマに滞在し、美術史・考古学の学術的伝統を誇るフランス学術院およびヘルツィアーナ図書館(マックス・プランク美術史研究所)を拠点に研究に従事し、ローマのユダヤ人共同墓地、帝都の港オスティア・アンティーカに現存するヨーロッパ最古のシナゴグ遺跡(1~2世紀頃)の現地調査を実施、ヴァチカン美術館所蔵のユダヤ教関連作品の調査も行った。その成果の一部は、2024年5月24日開催の第77回美術史学会全国大会講演「西洋中世美術からの再解釈-古代ローマの遺産、ユダヤ、イスラーム」にて口頭発表し、2024年に出版予定の『西洋中世文化事典』(丸善出版)に寄稿した。

(6) この他の研究成果として、ローマ市文化財監督局を代表するクラウディオ・パリージ=ブレシッチェ氏の協力のもと、ローマ市美術館連合の作品コレクションからなる「永遠の都ローマ展」(於: 東京都美術館、福岡市美術館、主催: 毎日新聞、NHK)を、日本側監修者として企画、実現した。この展覧会では、広く一般社会にむけて研究成果の一部を発信し、2023年9月には東京イタリア文化会館にて日伊合同講演会(イタリア大使館後援)を開催し、日本とイタリアの文化交流にも貢献した。

これまでの成果をまとめた初期ユダヤ教美術に関する研究書の執筆は継続中である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 加藤磨珠枝	4. 巻 展覧会カタログ
2. 論文標題 ローマのカピトリノの丘の象徴的役割 古代から中世を中心に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 永遠の都ローマ展	6. 最初と最後の頁 20-26, 221-224
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤磨珠枝	4. 巻 69
2. 論文標題 〔書評〕 Jas Elsner, ed., Empires of Faith in Late Antiquity: Histories of Art and Religion from India to Ireland, Pp.xvii+515, Cambridge UP 2020	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 西洋古典学研究	6. 最初と最後の頁 69-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤磨珠枝	4. 巻 61
2. 論文標題 〔書評〕 石鍋真澄著『教皇たちのローマ ルネサンスとバロックの美術と社会』（平凡社、2020年3月）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本の神学	6. 最初と最後の頁 169-173
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤磨珠枝	4. 巻 13
2. 論文標題 新刊紹介 John OSBORNE, Rome in the Eighth Century: A History in Art [British School at Rome Studies], Cambridge-New York, Cambridge University Press, 2020	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 西洋中世研究	6. 最初と最後の頁 155-156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤磨珠枝	4. 巻 44
2. 論文標題 永遠の都ローマ カピトリヌスの丘に立ちて(要旨)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 地中海学会研究	6. 最初と最後の頁 122-123
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤磨珠枝	4. 巻 11
2. 論文標題 教皇庁と女性――崇敬と蔑視の構造――	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 西洋中世研究	6. 最初と最後の頁 2-7
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤磨珠枝	4. 巻 11
2. 論文標題 中世初期ローマ教会における女性の職務とその表象について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 西洋中世研究	6. 最初と最後の頁 8-30
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件(うち招待講演 3件/うち国際学会 3件)

1. 発表者名 加藤磨珠枝
2. 発表標題 一千年紀のユーラシア宗教美術史 キリスト教と仏教を中心に「西洋中世美術からの再解釈 古代ローマの遺産、ユダヤ、イスラーム」
3. 学会等名 美術史学会 第77回全国大会(招待講演)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Masue Kato
2. 発表標題 Artistic dialogues between the law books and the tree of consanguinity in early medieval books
3. 学会等名 Legal manuscripts in the Frankish world: Interdisciplinary approaches to the formation and transformation of early medieval legal cultures (8th-11th centuries) (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 加藤磨珠枝
2. 発表標題 永遠の都ローマ展の楽しみ方
3. 学会等名 福岡市美術館
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 加藤磨珠枝
2. 発表標題 ローマ教皇とカピトリノ美術館
3. 学会等名 イタリア研究会 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 加藤磨珠枝
2. 発表標題 イントロダクションー象徴的な場としてのカピトリノ
3. 学会等名 イタリア文化会館 (国際研究会) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Masue Kato
2. 発表標題 Analysis of illustrations of Leges Salicae, Ripuariae, Longobardorum, Baiouarioum, Caroli Magni, Modena, Archivio Capitolare, 0. 1. 2.
3. 学会等名 5th meeting of the project “Legal culture(s) in the Frankish world” (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 加藤磨珠枝
2. 発表標題 初期ユダヤ教美術の諸問題
3. 学会等名 新約聖書画像研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 加藤磨珠枝
2. 発表標題 西洋中世写本挿絵の魅力
3. 学会等名 名古屋大学人文学研究科附属人類文化遺産テキスト学研究センター主催講演会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 加藤磨珠枝
2. 発表標題 永遠の都ローマ カピトリヌスの丘に立ちて
3. 学会等名 地中海学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 西洋中世文化事典編集委員会（分担執筆：加藤磨珠枝）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 -
3. 書名 西洋中世文化事典	
1. 著者名 加藤磨珠枝、クラウディオ・パリージ＝プレシッチェ共同監修	4. 発行年 2023年
2. 出版社 毎日新聞社、NHK	5. 総ページ数 248
3. 書名 永遠の都ローマ展 The Eternal City Rome: Masterpieces from the Capitoline Museums Collection （美術展カタログ）	
1. 著者名 Gaetano Curzi, Claudia D'Alberto, Marco D'Attanasio, Francesca Manzari, Stefania Paone, Masue Kato, Serena Romano, Sonia Antonelli, Giulia Orofino, Francesco Gandolfo, Valentino Pace, Etienne Anheim, Paola Refice, Gennaro Toscano, Michele Bernardini, Filippo Maria Ferro, Rossana Torlontano, Elisa Acanfora	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Campisano Editore	5. 総ページ数 624
3. 書名 Storia dell'arte on the road: Studi in onore di Alessandro Tomei	
1. 著者名 キリスト教文化事典編集委員会（分担執筆：加藤磨珠枝）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 790
3. 書名 キリスト教文化事典	

1. 著者名 秋山 聡・田中正之監修、芳賀満、芳賀京子、奈良澤由美、加藤磨珠枝、武田一文、高 晟竣、木俣元一、京谷啓徳、秋山 聡、宮下規久朗、尾関 幸、喜多崎 親、天野知香、田中正之、井口壽乃	4. 発行年 2021年
2. 出版社 美術出版社	5. 総ページ数 432
3. 書名 美術出版ライブラリー「西洋美術史」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

公開講演会「古代美術とローマ市民」 https://www.rikkyo.ac.jp/events/2023/09/mknpps000002ba3m.html 第77回美術史学会全国大会プログラム https://jahs77aichi.studio.site/1

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 古代美術とローマ市民 教皇シクストゥス4世の寄贈(1471年)からローマ首都宣言(1871年)にいたるまでのカピトリノ美術館	開催年 2023年～2023年
--	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------